配布版

自然と人をつなぐ仕事

自然と人との関係の設計

野口浩二 著

配布版について

本書は、書籍『自然と人をつなぐ仕事』のPDF配布版です。保全に関わる学生や若い世代の方々に役立てていただき、現場での実践や研究が進むことを願い、無償で公開しています。

本PDFは、非営利目的に限り配布いただけます。本PDFの改変・再編集を行った上での再配布はご遠慮ください。営利目的での販売・転載はご遠慮ください。

本書の内容は今後更新される場合があります。修正は主にKindle版に反映されますので、最新の内容はそちらをご確認ください。書籍（紙版）もございますので、内容に関心をお持ちいただけましたらご検討いただけますと幸いです。

Kindle版

https://www.amazon.co.jp/dp/B0CWLRDQMS

本書に関するお問い合わせ先

電子メール　info@interight.co.jp

引用・参考文献の表記例

野口浩二（2026）『自然と人をつなぐ仕事』日本インテライツ株式会社

Koji Noguchi (2026) Connecting People and Nature. Nippon Interights Co., Ltd.

© 2026 Koji Noguchi / 日本インテライツ株式会社

第2版（PDF配布版）2026年4月2日

はじめに

本書では、「自然と人との関係設計」という新しい仕事と、その役割を現場で担う「関係コーディネーター」という職業を定義します。自然そのものではなく、「人と自然との関係」に働きかける仕事です。

関係設計とは、自然と人との関係を設計し、調整し、運用することで、自然の価値の現れ方を社会の中に広げていく役割です。同じ場所であっても、関わる人や関わり方が変われば、価値の現れ方は大きく変わります。本書は、その変化を意図的に生み出す仕事について書いたものです。

免責事項および本書の前提

本書の内容は、著者がこれまでの活動を通じて見聞きし、考察した内容に基づいています。記述の正確性には十分配慮しておりますが、事実関係に誤りがあればご指摘いただけますと幸いです。 本書に記載されている見解は著者個人のものであり、特定の自治体、団体、企業、関係機関の公式見解を示すものではありません。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

なぜ関係に着目したのか

この考え方は理論から生まれたものではありません。現場での実践の中から生まれました。

私は地域で自然の保全と活用に取り組む中で、一つの違和感に直面しました。保全と活用によって価値は現れると考え、活動を始めました。実際に生き物は増え、人も集まり、活動は広がっていきました。

しかし、その先の地域の姿を考えたとき、そこに地域の人と自然との関係が続いていく様子は見えませんでした。外から人は来ますが、地域の中では関係がつながっていきません。活動は広がっても、地域の構造は変わらなかったのです。

このとき気づいたのは、問題は自然そのものではなく、「人と自然との関係」にあるということでした。関係のあり方が変わらなければ、価値の現れ方も変わらないのです。

関係が価値の現れ方を決める

同じ自然であっても、関わる人がいなければ価値はほとんど現れません。関わる人が増えることで、価値の現れ方は変わっていきます。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

自然の価値は「あるかないか」ではなく、人とどのような関係にあるかによって現れ方が決まります。そしてその関係は、放置すれば偏り、やがて機能しなくなります。だからこそ、関係に働きかける仕事が必要になります。

本書の位置づけ

本書で扱う「関係設計」は、「人と自然との関係」に働きかけることで関係構造を変え、自然の価値の現れ方を変える仕事です。その結果として、地域や社会の課題の解決につなげていきます。

本書ではまず、現場での実践をもとに、この仕事が必要となった背景を示します。次に、関係構造や関係の開放度という視点から、価値の現れ方を理論として整理します。最後に、この仕事を社会に定着させるために必要な技術や制度について考えていきます。

本書の目的は、単なる概念の提示ではありません。この仕事を、社会の中で機能する職業として成立させることにあります。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

目次

免責事項および本書の前提..... 2
はじめに..... 3
なぜ関係に着目したのか..... 4
関係が価値の現れ方を決める..... 4
本書の位置づけ..... 5
第1章　自然を変えれば価値は生まれるのか..... 11
はじまり..... 11
自然と人との関係設計..... 12
第２章　自然と人との関係設計が生まれた背景..... 13
すべては現場から生まれた..... 13
なぜ人によって自然の価値は違って見えるのか..... 14
価値の現れ方は変えることができるのか..... 15
関係に働きかける人は何をしているのか..... 16
なぜ専門職として必要なのか..... 18
第３章　田んぼビオトープの実践から見えたこと..... 20
活動の出発点..... 21
一見すると成功していた..... 22

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

価値の再定義..... 23
関係を設計し直す..... 24
振り返りから見えたこと..... 24
役割の不在..... 25
次章に向けて..... 25
第４章　自然の価値とは何か..... 26
自然の価値はどのように整理されてきたか..... 26
最近注目される「関係的価値」..... 27
本書の立場..... 28
第５章　自然と人との関係理論..... 29
4つの基本要素..... 29
関係は一つではない..... 30
関係構造という考え方..... 30
関係構造が変わると価値の現れ方..... 31
田んぼビオトープの関係構造..... 31
関係構造には偏りが生まれる..... 32
関係構造は変えることができる..... 32
第６章　鍵となる関係の開放度..... 33
関係構造をどう変えるのか..... 33

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

4つの基本パターン..... 34
4つの状態の特徴..... 35
田んぼビオトープの事例..... 36
関係の開放度は調整するための指標..... 36
関係設計の考え方..... 37
第７章　関係に働きかける..... 38
理論を行動に変える..... 39
行動は4つに整理できる..... 39
① 見えるようにする..... 40
② 関係を把握する..... 40
③ 小さく試す..... 41
④ 継続して調整する..... 41
本章の本質..... 42
第８章　関係構造を動かす仕事..... 43
誰が関係に働きかけるのか..... 43
関係を設計しコーディネートする..... 44
なにをしているのか..... 44
なぜ必要なのか..... 45
他の仕事との違い..... 45
直接ではなく、間接の仕事..... 46
田んぼビオトープの事例でみる..... 46

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

本章のまとめ..... 47
第９章　関係設計のスキル..... 48
能力を誤解しない..... 48
3つのコアスキル..... 49
① 構造を見る力..... 49
② 設計する力..... 50
③ 調整する力..... 50
事例で見る..... 51
どう身につけるか..... 51
本章のまとめ..... 52
次章に向けて..... 52
第１０章　関係設計を仕事にする..... 53
見えていなかった仕事..... 53
なぜ今、職業化が必要か..... 54
位置づけ..... 54
役割は分かれる..... 55
構造として見る..... 56
どこで費用を生むか..... 56
キャリアとしての流れ..... 57
本章のまとめ..... 57

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

第１１章　関係設計の汎用性..... 58
自然に限られた話なのか..... 58
共通する問題の構造..... 59
関係設計という基盤技術..... 59
分野ごとの違い..... 60
関係設計の役割..... 60
適用範囲を見極める..... 61
本書の範囲..... 61
本章のまとめ..... 62
第１２章　関係コーディネーターの養成..... 63
なぜ養成が必要か..... 63
養成の基本原則..... 64
学びの3段階..... 64
学びは循環する..... 65
実践の設計..... 65
成長のプロセス..... 66
最終章　自然と人をつなぐ社会へ..... 67
本書で明らかにしてきたこと..... 67
社会における意味..... 68
関係という視点..... 68
これからに向けて..... 69
おわりに..... 70
参考文献..... 71

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

第１章

自然を変えれば価値は生まれるのか

はじまり

私は2020年から、鳥取県南部町で生物多様性の保全と観光体験への利活用に取り組んできました。この地域の自然は、田畑や山林など、人の手によって維持されてきた里山です。

活動の中で、研究者、ガイド、観察員、行政職員、事業者など、多くの人と出会いました。多くの人は別の仕事を持ちながら、それぞれの立場で自然に関わっていました。

その姿には共通点がありました。この活動は何なのか。なぜ自分が関わるのか。自分が担ってよいのか。そうした問いを抱えながらも、目の前の自然を守りたいという思いで関わっていたのです。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

私もまたその一人でした。活動を続ける中で、この仕事には生態学や土木といった専門知識だけでは説明できない要素があると感じていました。しかし、それを言葉にすることができませんでした。

その意味を捉えるきっかけとなったのが、田んぼビオトープの実践でした。

自然と人との関係設計

この経験から見えてきた仕事の全体像を、ここで整理します。

本書では、この仕事を「自然と人との関係設計」と呼び、その役割を担う人を「関係コーディネーター」と呼びます。この仕事は、まだ社会の中で明確に認知されているものではありません。本書は、実践から生まれた一つの提案です。

関係設計の前提は、次の三点に整理できます。

・自然の価値と、その現れ方は異なる
・価値の現れ方は、人との関係（関係構造）によって変わる
・関係構造は変えることができる

この前提に立つと、関係に働きかけることで価値の現れ方を変え、社会をよりよい方向に動かすことができます。この役割を現場で担うのが、関係コーディネーターです。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

第２章

自然と人との関係設計が生まれた背景

すべては現場から生まれた

　この仕事は、理論から生まれたものではありません。田んぼビオトープの実践と、そこで出会った人たちとの関わりの中から見えてきたものです。

　活動を続ける中で、いくつかの問いが生まれました。

　それらを整理していくことで、これまで見えていなかった役割の存在に気づきました。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

なぜ人によって自然の価値は違って見えるのか

同じ場所であっても、人によって感じる価値は大きく異なります。ある人にとっては意味のない場所でも、別の人にとっては重要な場所になります。

この違いは、自然そのものの価値の違いではありません。価値の「現れ方」の違いです。自然の価値はもともと存在していますが、それがどれだけ現れているかは、その自然に関わる人によって変わります。人が感じている価値は、自然そのものではなく、関係の中で現れている価値なのです。

たとえば、都市の緑地に触れたとき、貴重な自然だと感じる人もいれば、何が珍しいのか分からないと感じる人もいます。また、不動産としては価値が低いとされる土地の自然を、大切に守り続けている人もいます。さらに、ある地域では当たり前に見られる生き物が、別の地域では希少な存在として扱われることもあります。移住してきた人にとってそこは宝の山だと感じることがあります。

つまり、価値は自然の中に固定されているものではなく、人との関係の中で現れ方が変わるものなのです。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

価値の現れ方は変えることができるのか

　では、価値の現れ方は変えることができるのでしょうか。この問いに対する答えは、可能です。

　ただし、自然そのものを変える必要はありません。価値の現れ方は、その自然に関わる人たちとの関係、つまり関係構造によって決まります。

関係構造の背景には、それぞれの人の価値観があります。価値観そのものを変えることは簡単ではありませんが、誰が関わるのか、どの程度の頻度で関わるのかといった関係の強さや関わり方は調整することができます。

　たとえば、耕作放棄された田畑や管理されなくなった森林も、自然教育の場として活用することで、新たな関係が生まれます。また、それまで誰にも注目されていなかった場所で希少種が見つかり、保全の場として整備されることで、研究者や地域の人が関わる場所へと変わることがあります。さらに、都市の緑地でも見せ方や関わり方を工夫することで、企業活動の場にとどまらず、通行する人にとって身近に自然と触れ合える場所としての価値が現れるようになります。

　つまり、関係に働きかけることで、自然の価値そのものを変えなくても、その現れ方は変えることができるのです。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

関係に働きかける人は何をしているのか

では、その関係に働きかけている人は、実際に何をしているのでしょうか。

現場で行われているのは、自然と人との関係を発見し、関係構造を整理し、関係者とともに関わり方を少しずつ変えていくことです。誰が関わっているのか、どの関係が強く、どの関係が弱いかを把握し、それぞれの関係を調整していきます。

その結果として、自然の価値の現れ方が変わり、地域の課題や自然の状態にも変化が生まれます。自然そのものに直接手を加えるのではなく、関係を通じて変化を生み出している点が特徴です。

この役割には、生態系や土木といった専門知識だけでなく、関係を見つけ、整理し、調整し、動かしていく力が求められます。また、一人で担うことは難しく、関係者の中で役割を分担しながら進めることが重要です。

たとえば、教育委員会と連携してオオサンショウウオの保全と環境学習を行う場合、行政は手続きを担い、民間団体は現場での活動を行い、環境コンサルタントは調査を担当します。このとき重要になるのが、土地所有者や地域住民との合意形成です。これまで自由に使われていた場所が制限される可能性もあるため、関係者を整理し、丁寧に説明しながら新たな関係をつくっていく必要があります。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

また、田んぼビオトープを体験の場として活用する場合には、農地法との整合性の確認、土地所有者との調整、周辺の利用者への説明、生態系の調査、交通手段の手配など、多くの関係が関わります。これらをつなぎ、調整していく役割が求められます。

さらに、都市の緑地で自然に触れる環境を整える場合でも、新たな関係が生まれることで、落ち葉への対応や植物の採取といった課題が発生します。こうした変化に対応しながら、関係を維持し、調整していくことも重要な役割です。

つまり、関係に働きかける人は、自然と人との間にある関係を見えるようにし、それを調整し続けることで、価値の現れ方を変えているのです。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

なぜ専門職として必要なのか

ここまで読むと、こう感じるかもしれません。

すでに現場で関係に働きかけている人がいるのだから、新たに専門職として定義する必要はないのではないか。行政の環境部局や環境コンサルタントが担えば十分ではないか、という疑問です。

しかし、現場の状況を見ると、こうした役割を専門職として位置づける必要性が高まっています。その背景には、大きく三つの要因があります。

第一に、人口減少です。これまでの社会では人が多く、関係はある程度自然に生まれてきました。しかし、人口が減少する社会では、関係は自然には生まれません。人と人との関係が希薄になるだけでなく、自然と人との関係も弱まっていきます。放置される山林や耕作放棄地が増え続けています【8】。関係は自然に生まれるものではなく、意図的に設計し、支える必要がある段階に来ています。

第二に、人材の育成に時間がかかることです。これまでは、ガイドや観察員、研究者などがそれぞれの立場で関わってきましたが、課題が複雑化する中で、対応できる人材を計画的に増やしていく必要があります。人口が減少する中でこれを実現するためには、個人の善意や偶然に頼るのではなく、一定の仕組みと効率性を持った育成が求められます。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

第三に、この役割が高い専門性を持つことです。扱う対象は「関係」という目に見えにくいものです。生態系に関する知識だけでなく、人と人との関係の調整、制度や法律の理解など、複数の領域にまたがる知識と実践力が必要になります。これらを横断的に扱うには、専門的な役割として整理することが不可欠です。

つまり、関係に働きかけるという行為は、すでに現場で行われているものの、これからの社会では、それを意図的に設計し、担い手を育成していく必要があります。そのために、この役割を専門職として定義することに意味があります。

次の章で、私がこの職業が必要であると感じた田んぼビオトープでの出来事を紹介します。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

第３章

田んぼビオトープの実践から見えたこと

この章では、私が2020年に始めた田んぼビオトープの活動を紹介します。信金中央金庫 地域・中小企業研究所（2024）は、本取り組みを地域のブランド価値向上の事例として紹介しています【9】。

その実践を通じて、新しい役割がなぜ必要だと感じたのか、そしてその難しさがどこにあったのかを見ていきます。

この活動は、最初から明確な形があったわけではありません。小さな耕作放棄地から始まり、さまざまな人との出会いを経て、小さな成功と失敗を繰り返しながら、少しずつ輪郭が見えてきたものです。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

活動の出発点

私がこの活動を始めたきっかけは、人口減少が進む地域で、管理されなくなった山林や田畑を別の形で維持できないかと考えたことでした。

一人の自然観察指導員との出会いを通じて、この地域が持つ自然のポテンシャルを知りました。同時に、世界では生物多様性を資産として捉え、経済と結びつけて活用しようとする動きが広がっていることも知りました。

そこで私は、田んぼビオトープを整備することで、こうした流れを地域に取り込み、放置されつつある自然に再び人の関心が向くのではないかと考えました。

写真３－１　田んぼビオトープになる前の田んぼ。草木が茂り地形を確認することも出来なかった。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

一見すると成功していた

この取り組みは、一定の成果を上げているように見えました。

自然共生サイトへの認定を受け、再生型観光の流れとも重なり、観光や学習の場として広がっていきました。

しかし、活動を進める中で、次第に違和感が生まれていきました。

経済的な価値を高めようとするほど、単価の高い顧客を選び、効率的な運営を目指すようになります。その結果、関係は絞られ、地域の人と自然とのつながりが、再び見えにくくなっていきました。

このとき、私は問い直すことになります。

これは何のための活動なのか、と。

写真３－２　2025年に開催した自然共生サイト「南部町の里地里山ビオトープ」の視察に多くの人が集まった。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

価値の再定義

この問いに向き合う中で、私はこの場所にとっての価値を次の三つに整理しました。

・経済的価値（活動を継続するために必要な価値）
・来訪者と地域とのつながり（訪れるだけで終わらない関係）
・地域の人が土地を大切にする気持ち（暮らす人の尊厳）

田んぼビオトープは、もともと土地所有者との関係が弱くなっていた場所でした。そこに研究者や体験参加者、保全に関心のある人が関わることで、新たな関係が生まれました。

しかし、経済価値を優先し、高単価で効率的に運営する方向では、自分が目指していた未来にはつながらないと感じました。

写真３－３　土地を守る地域の人たちの様子

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

関係を設計し直す

そこで私は、価値に応じて関係を組み直すことにしました。

高単価で効率的な体験を求める人には、それに適したサービスを提供する。一方で、地域の人と関わりたい人には、交流の機会を用意する。さらに、地域の人に対しては、この土地がどのように評価されているのかを知る機会を設けました。

一つの価値に統一するのではなく、複数の価値に対応した関係を設計する方向へと転換したのです。

振り返りから見えたこと

当時は意識していませんでしたが、振り返ってみると、私が行っていたのは「自然と人との関係設計」でした。

土地所有者との関係を調整し、新しく訪れる人との関係をつくり、自然と人との関係そのものを動かしていました。最初は経済価値を高める方向に関係を設計していましたが、それでは不十分だと気づいたとき、関係のあり方を見直し、調整していきました。

つまり、私がしてきたことは、自然と人との関係を設計し、その現れ方を変えていく仕事だったのです。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

役割の不在

しかし、そのときの私は、この仕事をどのように捉えればよいのか分かりませんでした。

ガイドなのか、経営者なのか、自然と人の価値をつなぐ翻訳者のような役割でもありました。場面によって呼ばれ方は変わり、一つの職業として定義されてはいませんでした。

それでも、現場では確かにこの役割が求められていました。

次章に向けて

この経験から見えてきたのは、自然の価値は自然そのものだけでは決まらず、「関係のあり方」によって現れ方が変わるということでした。

次章では、この実践から得られた気づきをもとに、関係構造という視点から価値の現れ方を理論として整理していきます。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

第４章

自然の価値とは何か

本章では、自然と人との関係を設計するために、その土台となる「自然の価値」について改めて整理します。

なお、本章はやや理論的な内容を含みます。難しいと感じる場合は、先に進んでいただいても構いません。

自然の価値はどのように整理されてきたか

自然の価値は、これまで主に「生態系サービス」という枠組みで整理されてきました【１】。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

生態系サービスとは、自然が人の暮らしを支える多様な機能を持っているという考え方です。水を浄化し、災害を緩和し、食料を生み出すなど、その働きを人にとっての利益として捉えます。現在の政策や経済の中でも広く用いられている主要な考え方です【4】【5】【6】【7】。

最近注目される「関係的価値」

こうした「サービス」として自然の価値を捉える考え方は、社会に広く理解を促すうえで大きな役割を果たしました。しかし、現場の改善に十分につながらないという課題も見えてきました。

そこで注目されるようになったのが「関係的価値」です。

関係的価値とは、自然の価値が人との関係の中で現れるという考え方です。関わる人の価値観や関わり方によって、同じ自然でも価値の現れ方が変わると捉えます。

現在では、自然の価値は次の三つの視点で整理されることが多くなっています【2】【3】。

・道具的価値（生態系サービスなど経済的価値を含む）
・内在的価値（自然そのものに備わる価値）
・関係的価値（人と自然の関係性から生まれる価値）

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

本書は、この三つの価値すべてを前提とします。どれか一つを選ぶのではなく、すべてが必要であるという立場です。

そのうえで、本書は特に「関係的価値」に着目し、地方で放置されている山林や田畑の問題をどのように解決できるのかを考えていきます。

本書の立場

本書では、自然の価値そのものだけでなく、「価値の現れ方」に着目します。

同じ自然であっても、その価値がどれだけ現れているかは、人との関係によって変わります。この関係の全体像を、本書では「関係構造」と呼びます。

そして重要なのは、この関係構造は働きかけることができるという点です。

次章では、この関係構造をどのように整理できるのかを示し、その中でも特に影響の大きい要素である「関係の開放度」について詳しく見ていきます。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

第５章

自然と人との関係理論

本章では、「関係的価値」の視点から、自然の価値の現れ方に影響する要素を整理します。ここで扱うのは、自然そのものの価値ではなく、その価値がどれだけ現れているかという点です。

4つの基本要素

本書では、自然の価値の現れ方を、次の四つの要素で整理します。

・自然（対象：そこにあるもの。本書では直接変える対象ではない）
・関係（人と自然との関わり方）
・関係の強さ（関わる頻度や深さ）
・結果（価値の現れ方）

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

これらの要素は独立しているのではなく、相互に影響し合っています。特に重要なのは、「関係」と「関係の強さ」によって、価値の現れ方が変わるという点です。

関係は一つではない

実際の現場では、人と自然との関係は一つではありません。一つの自然に対して、複数の関係が同時に存在しています。 たとえば、同じ場所であっても、

・農業として関わる
・学びの場として関わる
・観光として利用する
・日常の風景として関わる

といった異なる関係が重なり合っています。これらの関係の背景には、それぞれの人が持つ価値観があります。

関係構造という考え方

本書では、こうした関係の全体像を「関係構造」と呼びます。

関係構造とは、誰が関わり、どの関係が強く、どの関係が弱いのかという、関係の配置とバランスのことです。重要なのは、個々の関係そのものではなく、それらがどのように組み合わさっているかです。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

関係構造が変わると価値の現れ方

同じ自然であっても、関係構造が変われば、価値の現れ方は変わります。たとえば、

- 生業の関係が中心の場所
- 観光の関係が中心の場所
- 学びの関係が中心の場所

それぞれで、現れる価値の内容や量は異なります。

田んぼビオトープの関係構造

田んぼビオトープの事例で考えてみます。

この場所はもともと、農業を通じて人の暮らしと密接に結びついた場所でした。しかし近代化の中で、生産性が重視される関係へと変化していきます。その後、人口減少によって農業との関係が弱まり、耕作放棄地となりました。

そこに私たちが関わることで、新たな関係が生まれました。保全に関わる人、研究する人、観光として訪れる人など、多様な関係が重なり合うようになりました。

このような変化は、自然そのものの変化ではなく、関係構造の変化として捉えることができます。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

関係構造には偏りが生まれる

関係構造は常に変化し、その中で偏りが生まれます。特定の関係だけが強くなったり、逆に関係が弱くなったりすることで、価値の現れ方も偏っていきます。

本書では、このような偏りを整理し、どのように扱うかを後の章で示します。

関係構造は変えることができる

関係構造の重要な点は、働きかけることで変えることができるという点です。

自然そのものを変えなくても、関係のあり方を変えることで、価値の現れ方を変えることができます。

次章では、関係構造に働きかける際に特に重要となる要素として、「関係の開放度」について整理していきます。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

第６章

鍵となる関係の開放度

前章では、自然の価値の現れ方は関係構造によって決まることを示しました。本章では、その関係構造にどのように働きかけるのかという具体的な方法を扱います。

関係構造を捉えるために、本書では二つの軸を用います。それが「関係の開放度」と「関係の接続性」です。

関係構造を捉える2つの軸

関係構造は、次の二つの観点から整理することができます。

・関係の開放度
・関係の接続性

関係の開放度とは、その関係がどの程度外に開かれているか、どの程度新しい関わりを受け入れる状態にあるかを示すものです。具体的には、誰が関われるのか、どのような条件で関われるのか、どこまで関われるのかといった点で捉えることができます。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

一方で、関係の接続性とは、関係同士がどの程度つながっているかを示すものです。関係が孤立しているのか、それとも相互につながり、影響し合っているのかという状態を表します。

この二つの軸を組み合わせることで、関係構造の状態をより正確に捉えることができます。

４つの基本パターン

関係構造は、「開放度」と「接続性」の組み合わせによって、次の四つの状態として整理することができます。

- 独占（開放度が低い × 接続性が高い）
- 分断（開放度が低い × 接続性が低い）
- 希薄（開放度が高い × 接続性が低い）
- 過密（開放度が高い × 接続性が高い）

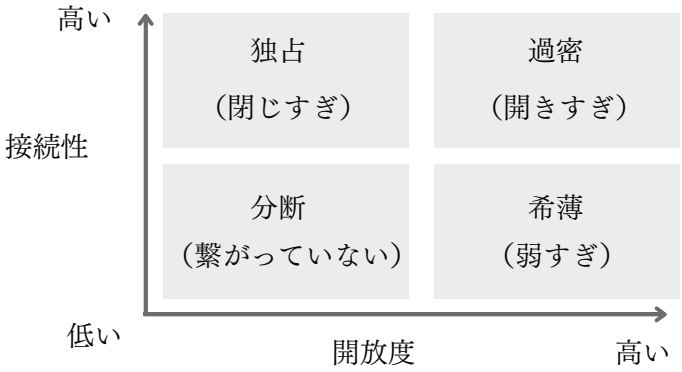

図６－１　関係構造の４つのパターン

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

4つの状態の特徴

独占は、関係が閉じており、特定の人や組織の内部で強くつながっている状態です。安定しているように見えますが、外から関わる余地が少なく、新しい価値は生まれにくくなります。

分断は、関係そのものは存在しているものの、それぞれが孤立しており、つながっていない状態です。情報や価値は部分的にしか共有されず、全体としての価値は現れにくくなります。

希薄は、関係は開かれているものの、つながりが弱く、関与が浅い状態です。人の出入りはあるものの、継続的な関係にはつながらず、価値が蓄積されません。

過密は、関係が開かれ、かつ強くつながりすぎている状態です。多くの関係が集中することで調整が難しくなり、方向性が定まらず、価値の現れ方が不安定になります。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

田んぼビオトープの事例

田んぼビオトープの初期は、関係が限られており、開放度は低い状態でした。

その後、観察会や体験の機会を設けることで関係は徐々に開かれていきました。その結果、

・来訪者が増え
・関係の種類が増え
・価値の現れ方が広がりました

一方で、開きすぎることで、地域との関係が弱まり、構造に偏りが生まれる兆候も見えてきました。

関係の開放度は調整するための指標

関係の開放度は、「高ければよい」「低ければよい」というものではありません。調整すべき対象です。

どの程度開くのか、どこで制限するのかを判断し、現場で調整していくことが重要です。

これが「関係コーディネーター」の中心的な役割です。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

関係設計の考え方

関係の開放度は、調整すべき対象であるというのが「自然と人との関係設計」の基本となる考え方です。

重要なのは、どれくらい開くか、または閉じるか、を決めて、現場で調整していくのが「関係コーディネーター」の役割です。

次章では、この関係の開放度にどのように働きかけるのか、その具体的なプロセスを整理します。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

第７章

関係に働きかける

理論を行動に変える

ここまでで、自然の価値の現れ方は関係構造によって決まることを整理してきました。

では、それらに対して現場でどのように働きかければよいのでしょうか。本章では、そのための基本的な行動を整理します。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

行動は4つに整理できる

関係に働きかける行動は、次の4つに整理できます。

①見えるようにする
②関係を把握する
③小さく試す
④継続して調整する

これらは一方向に進む段階ではなく、状況に応じて何度も行き来する循環的なプロセスです。

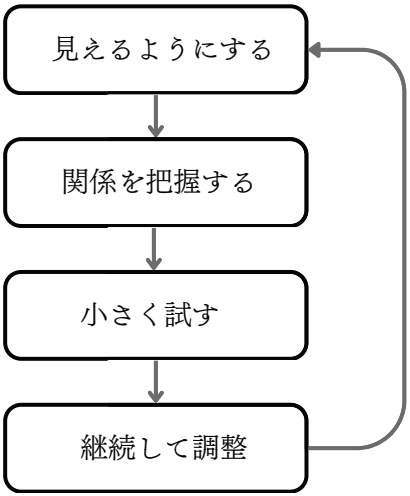

図７－１　関係に働きかける４つのプロセス

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

① 見えるようにする

最初に必要なのは、価値を「見える状態」にすることです。言い換えれば、価値を言葉にして定義することです。

価値は存在していても、気づかれなければ関係は生まれません。たとえば、

・土地所有者以外に、その場所を大切に思っている人はいないか
・関わる人が大切にしている価値観は何か
・経済的な価値以外に見落としている価値はないか

こうした問いを通じて、すでに存在している価値に気づける状態をつくります。

田んぼビオトープの事例では、価値を一つに絞るのではなく、複数の価値として整理しました。

② 関係を把握する

次に必要なのは、関係構造を把握することです。

・誰が関わっているのか
・どの関係が強いのか
・どこに偏りがあるのか

これらを整理することで、現状の構造が見えてきます。ここで重要なのは、個別の活動を見るのではなく、関係全体の配置とバランスを見ることです。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

③ 小さく試す

関係は一度に変えることはできません。そのため、小さな試行を繰り返すことが重要になります。

たとえば、

・新しい関わり方を試す
・小さな場や機会をつくる

ここで重要なのは、計画よりも実践です。関係構造がどのように価値の現れ方に影響するかは、実際に動かしてみなければ見えてきません。

ただし、一度の試行で関係を大きく変えすぎないことも重要です。元に戻せない変化は避け、小さく試しながら調整していきます。

④ 継続して調整する

関係は、一度整えれば終わりではありません。時間とともに変化し、関係構造も変わっていきます。

そのため、継続的に見直し、調整し続ける必要があります。 たとえば、

・特定のパターン（独占・分断・希薄・過密）に偏っていないか
・関係の開放度を調整する必要がないか
・役割の分担が機能しているか

こうした視点で、関係の状態を点検していきます。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

本章の本質

ここで重要なのは、これらの行動は自然の価値を新たに生み出す方法ではないという点です。

そうではなく、価値が現れるように関係を調整する方法です。

自然そのものを直接変えるのではなく、関係に働きかけることで、結果として価値の現れ方が変わります。

そして、この一連のプロセスを現場で担うのが「関係コーディネーター」です。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

第８章

関係構造を動かす仕事

誰が関係に働きかけるのか

　ここまで見てきたように、自然の価値の現れ方は関係構造によって決まります。また、その関係は放置すれば歪み、価値は現れにくくなります。では、この関係に働きかけるのは誰なのでしょうか。自然は自ら関係を整えることはできず、関係もまた自然には整いません。だからこそ、それに意図的に働きかける役割が必要になります。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

関係を設計しコーディネートする

本書では、この役割を「関係コーディネーター」と呼びます。関係コーディネーターとは、人と自然との関係に働きかけ、関係構造を変えることで、自然の価値の現れ方を変え、結果として社会の課題の解決や自然の価値の向上につなげる仕事です。

この仕事の対象は、自然そのものでも、人そのものでもありません。対象はあくまで「関係構造」です。

なにをしているのか

関係コーディネーターの仕事は、これまで見てきた行動として現れます。関係を見えるようにし、関係構造を把握し、新しい関係を小さく試し、継続的に調整していく。これらの行動を通じて、関係のあり方そのものに働きかけています。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

なぜ必要なのか

これまで、この役割は明確な仕事として認識されてきませんでした。研究者、行政、教育、地域の担い手などが、それぞれの活動の中で部分的に担ってきたためです。

しかし、関係が複雑化する現在において、この役割は片手間では担えなくなっています。人口減少が進み、人と人との関係だけでなく、自然と人との関係も自然には維持されなくなっているからです。だからこそ、関係構造に働きかけること自体を専門とする仕事が必要になります。

他の仕事との違い

関係コーディネーターの仕事は、従来の専門職とは異なる位置にあります。生態系の専門家でもなく、観光の専門家でもなく、行政や教育そのものでもありません。それらの専門性を前提としながら、それらを「関係」として機能させる役割です。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

直接ではなく、間接の仕事

この仕事の特徴は、結果が間接的に現れる点にあります。自然を直接変えるのではなく、人を直接動かすわけでもありません。関係を変えることで、結果として価値の現れ方が変わります。

そのため、成果は見えにくく、評価もされにくい側面があります。しかし、この役割がなければ、関係は維持されず、価値も持続しません。

田んぼビオトープの事例でみる

田んぼビオトープの取り組みを振り返ると、私は自覚のないままこの役割を担っていました。土地所有者との関係を構築し、制度との整合性を保ち、人と人をつなぎ、関係を継続的に調整してきました。

これらは単なる活動ではなく、関係構造に働きかける行為でした。その結果として、自然の価値の現れ方が変わっていったのです。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

本章のまとめ

自然の価値は、関係の中で現れます。そして、その関係は自然には整いません。だからこそ、関係に働きかける仕事が必要になります。それが、関係設計であり、「関係コーディネーター」の役割です

では、この仕事を担うためには、どのような力が必要なのでしょうか。次章では、関係コーディネーターに求められる能力について整理します。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

第９章

関係設計のスキル

能力を誤解しない

関係設計は、人をつなぐことだと思われがちです。しかし、それだけでは十分ではありません。人をつなぐことはあくまで手段であり、目的は関係構造を変えることにあります。

ここで誤解されやすいのが、専門知識の位置づけです。生態系の知識や制度の理解、技術的なスキルは現場では確かに重要ですが、それらをすべて一人で担う必要はありません。むしろ重要なのは、それぞれの専門性を持つ人が関われる関係をつくり、それらを組み合わせて機能させることです。

そのために必要なのは、個別の専門スキルではなく、関係を扱うための力です。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

3つのコアスキル

本書では、関係設計の仕事に必要な力を、次の三つに整理します。

・構造を見る力
・設計する力
・調整する力

これらは独立したものではなく、相互に関係しながら機能します。

① 構造を見る力

最初に必要なのは、関係構造を把握する力です。誰が関わっているのか、どの関係が強いのか、どこに偏りがあるのかを見抜くことができなければ、適切な働きかけはできません。

ここで重要なのは、個別の活動ではなく、関係を全体の配置として捉えることです。関係の一つひとつではなく、それらがどのように組み合わさっているかを見る視点が求められます。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

② 設計する力

次に必要なのは、関係を設計する力です。誰が関わるのか、どのような役割を持つのかを考え、関係構造図をつくります。

関係は自然には生まれません。設計することで初めて生まれます。関係の入り口を用意し、関わり方に段階を持たせ、役割を整えることで、関係は機能し始めます。

③ 調整する力

最後に必要なのは、関係を調整する力です。関係は必ず摩擦を生みます。立場や価値観の違いによって、対立やズレが生まれるからです。

それを放置すれば関係は崩れてしまいます。対話の場を設計し、役割を見直し、バランスを整えることで、関係は維持されます。調整とは、対立をなくすことではなく、関係が続く状態をつくることです。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

事例で見る

田んぼビオトープの取り組みでも、この三つの力は繰り返し使われていました。誰が関わっているかを把握し、観察会や関わり方を設計し、関係の偏りを見直していく。この繰り返しによって、関係は少しずつ変化していきました。

関係は一度つくれば終わりではなく、継続的に動かし続けるものです。

どう身につけるか

これらの力は、知識だけでは身につきません。実際に関係に関わり、試行錯誤する中で育っていきます。

小さな場で実践し、関係を観察し、振り返る。この繰り返しが、最も確実な学びになります。経験の中でしか見えない構造や調整の感覚があるためです。後の章で育成の必要性も示します。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

本章のまとめ

関係設計に必要なのは、特定の専門知識そのものではありません。構造を見る力、設計する力、調整する力という三つの力です。

これらを組み合わせることで、多様な専門性をつなぎ、関係に働きかけることができるようになります。

次章に向けて

では、この仕事は社会の中でどのように位置づけられるのでしょうか。次章では、関係設計の仕事が職業として成立するのかを整理していきます。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

第１０章

関係設計を仕事にする

見えていなかった仕事

関係を設計し調整する関係コーディネーターの役割は、まったく新しいものではありません。これまでも現場には、同様の役割が確かに存在していました。研究者、行政職員、教員、ガイド、地域の担い手などが、それぞれの本来の仕事の中で、関係をつなぎ、調整し、維持してきました。

しかし、その役割は明確に認識されてこなかったため、「必要な仕事」として位置づけられず、多くの場合は兼務として担われてきました。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

なぜ今、職業化が必要か

この状況は、すでに限界に近づいています。人口減少が進む社会では、関係は自然には維持されなくなります。一方で、関係の複雑さは増しており、関わる人は多様化し、利害や価値観も大きく異なっています。

こうした状況の中で、関係を維持し調整する負担は確実に大きくなっています。この役割を片手間で担うことは難しくなっており、関係に働きかけること自体を専門とする職業として位置づける必要があります。

位置づけ

ここで重要なのは、関係設計は一人ですべてを担うものではないという点です。生態系の知識や技術、制度の理解は重要ですが、それらは個別の専門家が担う領域です。

関係設計の役割は、それらの専門性をつなぎ、関係として機能させることにあります。専門家を置き換えるのではなく、専門家同士をつなぐことで全体を動かす仕事です。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

役割は分かれる

関係設計の仕事は、役割と専門性に応じて分けることが出来ます。

■関係構造の設計

関係の全体構造を把握し、配置を設計し、関係構造図をかきます。

■関係構造の調整（関係コーディネーター）

関係を実際に動かし、人をつなぎ、対話を設計し、利害を調整する役割です。

■支援者（サポーター）

関係に参加し、協力し、関係の裾野を広げる役割です。

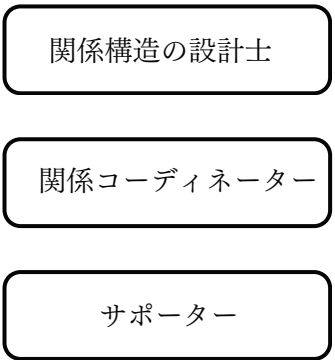

図１０－１　関係設計の仕事の分け方

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

構造として見る

これらの役割は、階層的な構造として捉えることができます。上位に設計があり、その下に調整があり、さらにその下に支援が広がります。

上に行くほど抽象度は高くなり、関与する人数は少なくなります。一方で、下に行くほど具体的な関わりとなり、多くの人が関与する構造になります。

どこで費用を生むか

関係設計の仕事は、目に見える成果ではなくプロセスに価値があります。そのため、費用は次のようなプロセスに対して設定することが現実的です。

- 価値を見えるようにする
- 関係構造を把握する
- 小さく試行する
- 継続して調整する

これらの多くは人件費として発生するものであり、継続的な関与に対して対価が支払われる設計が重要になります。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

キャリアとしての流れ

この仕事は、段階的に身につけることができます。最初は支援者として関係に参加し、次に調整を担う立場へと進み、最終的には関係構造を設計する役割へと発展していきます。

現場での経験を積み重ねることで、関係を見る力、設計する力、調整する力が統合され、専門性として確立されていきます。

本章のまとめ

関係設計と関係コーディネートは、これまで見えにくかった役割を言語化したものです。しかしそれは、今後の社会において不可欠な職業となる可能性を持っています。

関係を扱う力を基盤として、多様な専門性をつなぐ仕事として、この役割を社会の中に位置づけていく必要があります。

では、この仕事はどこまで適用できるのでしょうか。自然に限られるものなのか、それとも他の分野にも広がるのか。次章では、関係設計という考え方の適用範囲について整理していきます。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

第１１章

関係設計の汎用性

自然に限られた話なのか

ここまで本書では、自然を対象とした実践をもとに、関係構造、関係の開放度、関係に働きかける方法について整理してきました。では、この考え方は自然に限られたものなのでしょうか。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

共通する問題の構造

現場で見えてきたのは、多くの問題が共通した構造を持っているということです。自然が維持されなくなる、地域活動が続かなくなる、組織が機能しなくなるといった問題は、一見すると異なるものに見えます。

しかしその多くは、関係の希薄化や断絶によって生じています。誰が関わるのかが曖昧になり、役割が失われ、関係が維持されなくなる。その結果として、それぞれの仕組みが機能しなくなっていきます。人口減少社会が生み出した役割と言えるかもしれません。

関係設計という基盤技術

この視点に立つと、本書で整理してきた内容は自然に限らず、関係を扱うための基盤技術として捉えることができます。対象が変わっても構造は大きく変わりません。

誰が関わるのか、どのように関わるのか、どの関係が強くどの関係が弱いのか。これらを整理し、調整していくという点は、多くの分野に共通しています。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

分野ごとの違い

一方で、すべてが同じというわけではありません。各分野にはそれぞれ固有の専門性があります。自然であれば生態系や土地利用の理解が必要であり、組織であればマネジメントや意思決定、インフラであれば技術や安全性、制度の理解が求められます。これらは、関係設計だけで扱えるものではありません。

関係設計の役割

関係設計は、これらの専門性を代替するものではありません。むしろ、それらをつなぎ、関係として機能させる役割を担います。専門家がいても関係がなければ機能せず、関係が整えば専門性はより効果的に発揮されます。

関係設計とは、個々の専門性を活かすための基盤となる仕事です。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

適用範囲を見極める

実践の中で重要なのは、自分がどこまで扱えるのかを見極めることです。すべてを担う必要はありません。関係設計で対応できる領域と、専門家に委ねるべき領域を区別することが重要です。

そのうえで、必要な関係をつくり、全体として機能する状態を目指します。

本書の範囲

本書では、この中でも自然を対象とした関係設計を中心に扱ってきました。自然という具体的な対象を通じて、関係構造の捉え方と関係への働きかけ方を示してきました。

一方で、組織、地域、インフラといった領域にも同じ枠組みが適用できる可能性があります。これらについては、今後の実践と検討に委ねられる部分です。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

本章のまとめ

関係設計は自然に限られた技術ではなく、多様な分野に適用可能な基盤的な考え方です。ただし、それ単独で機能するものではなく、各分野の専門性と組み合わせて初めて効果を発揮します。

重要なのは、関係という視点を持ちながら、適用範囲を見極めることです。

関係構造の設計士（自然）

関係構造の設計士（組織）

関係構造の設計士（インフラ）

図１１－１　関係構造の設計士の分類

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

第１２章

関係コーディネーターの養成

なぜ養成が必要か

関係設計の役割は、これまで現場の中で自然発生的に担われてきました。しかし、その役割は明確に定義されず、体系的に学ぶ機会もほとんど存在していませんでした。

一方で、社会の状況は大きく変化しています。人口減少が進み、関係は自然には維持されなくなっています。このままでは、関係を扱う人材は確実に不足していきます。だからこそ、関係設計を担う人材を意図的に育成する必要があります。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

養成の基本原則

関係設計は、知識だけでは身につきません。関係は現場の中でしか理解できないからです。そのため、養成は次の三つを往復する形で行います。

・理解する
・設計する
・実践する

この循環が回ることで、関係を扱う力は徐々に身についていきます。

学びの3段階

養成は、次の三段階で構成します。

① 理解する

関係構造を読み取る力を身につけます。何が起きているのか、誰が関わっているのか、どこに偏りがあるのかを観察し、関係を言語化します。

② 設計する

関係を組み立てる力を身につけます。どのような関係をつくるのか、どの順序で関わるのか、どのような役割を持たせるのかを考えます。ここでは、小さな設計から始めることが重要です。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

③ 実践する

実際に関係を動かします。小さく試し、関係を観察し、結果を振り返ります。この経験が、最も重要な学びとなります。

学びは循環する

この三段階は一度で終わるものではありません。実践することで新しい課題が見え、再び理解し、設計し直します。この循環を繰り返すことで、関係を扱う力は深まっていきます。

実践の設計

養成において重要なのは、「何を教えるか」以上に「どのような場で学ぶか」です。

同じフィールドで継続して関わること、小さな関係から始めること、そして振り返りの機会を持つこと。これらの条件が揃うことで、学びは実践と結びつき、力として定着していきます。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

成長のプロセス

関係設計の力は、段階的に成長していきます。最初は支援者として関係に参加し、次に実務者として関係を運用し、調整を担うようになり、やがて関係構造を設計する立場へと進みます。

このプロセスは一度で到達するものではなく、現場での経験を通じて積み重なっていくものです。

関係設計は、知識ではなく実践によって育つものです。理解する、設計する、実践するという循環を繰り返すことが、最も確実な学びになります。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

最終章

自然と人をつなぐ社会へ

本書で明らかにしてきたこと

本書では、自然と人との関係に働きかける役割として、関係設計という考え方を提示してきました。

関係設計とは、関係構造を読み取り、関係に働きかけ、価値の現れ方を変えることで、社会の課題にアプローチする仕事です。自然そのものを変えるのではなく、関係を変えることで、結果として価値の現れ方を変えていく。この視点が、本書の中心にあります。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

社会における意味

人口減少が進む中で、多くの地域において関係は弱まりつつあります。自然も、地域も、組織も、関係が維持されなければ機能しません。これまで当たり前に存在していた関係は、これからは意図的に維持し、つくり直していく必要があります。

この状況において、関係を扱う力は、これからの社会にとって基盤的な力になります。関係設計は、その一端を担うものです。

関係という視点

自然の価値は、関係の中で現れます。そして、その関係は固定されたものではなく、設計し、調整することができるものです。

この視点を持つことで、自然と人との関わり方は大きく変わります。自然を守るか、利用するかという対立ではなく、関係をどうつくるかという問いに変わります。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

これからに向けて

本書で提示した関係設計という考え方は、まだ仮の形にすぎません。現場の中で試され、修正され、発展していくものです。しかし、すでに多くの現場で、この役割は必要とされ始めています。

関係を読み取り、関係に働きかける人が増えることで、自然の価値の現れ方は変わっていきます。そしてそれは、地域や社会のあり方そのものを変えていく力になります。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

おわりに

自然と人との関係は、これまで当たり前のものとして存在してきました。しかし、その多くはすでに失われつつあります。

だからこそ、これからは関係を意図的に設計し、育てていく必要があります。それは特別な誰かの仕事ではなく、さまざまな立場の人が関わりながら形づくっていくものです。

本書が、その一歩として、関係という視点に気づくきっかけになれば幸いです。そして、自然と人との関係を設計し、つなぎ直す人が一人でも増えていくことを願っています。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

参考文献

【1】World Resources Institute（2005）
"Millennium Ecosystem Assessment, 2005. Ecosystems and Human Well-being： Biodiversity Synthesis."
【2】IPBES（2019）生物多様性と生態系サービスに関する地球規模評価報告書 政策決定者向け要約
【3】IPBES（2022）自然の多様な価値と価値評価 の方法論に関する評価報告書
【4】Convention on Biological Diversity（2022）
Kunming-Montreal Global Biodiversity Framework
【5】鳥取県（2020）鳥取県生物多様性地域戦略
【6】環境省（2025）令和7年版 環境・循環型社会・生物多様性白書
【7】環境省　生物多様性「見える化」マップ
【8】農林水産省（2025）農林業センサス
【9】信金中央金庫（2024）藁品和寿
「生物多様性による地域のブランド価値向上への挑戦」
（里山生物多様性プロジェクトの事例研究）

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

自然と人をつなぐ仕事

初版　２０２６年４月７日
著者　野口浩二
発行　日本インテライツ株式会社
ホームページ　https://interight.co.jp/top/

本書に関するお問い合わせ先　電子メール　info@interight.co.jp

本PDFは、非営利目的に限り配布いただけます。本PDFの改変・再編集を行った上での再配布はご遠慮ください。営利目的での販売・転載はご遠慮ください。

本書の内容は今後更新される場合があります。修正は主にKindle版に反映されますので、最新の内容はそちらをご確認ください。書籍（紙版）もございますので、内容に関心をお持ちいただけましたらご検討いただけますと幸いです。

本書の内容は、著者の見聞および考察に基づくものであり、その正確性および結果を保証するものではありません。本書に記載された見解は著者個人のものであり、特定の自治体、団体、企業、関係機関の公式見解を示すものではありません。本書の内容を利用したことによって生じたいかなる結果についても、著者は責任を負いかねます。あらかじめご了承ください。

© 2026 Koji Noguchi / 日本インテライツ株式会社
第2版（PDF配布版）2026年4月2日

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

著者プロフィール

野口 浩二

一般社団法人里山生物多様性プロジェクト 代表理事。
鳥取県南部町出身。富山大学理学部卒業、名古屋大学大学院修了（修士）。
製造業のエンジニアを経て、地元に戻り活動を開始。2020年に法人を設立し、生物多様性の保全と利活用に取り組んでいる。

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）

配布版

自然と人をつなぐ仕事
自然と人との関係の設計

日本インテライツ株式会社

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）